

SCOUTING 茨城

ボーイスカウト茨城県連盟は、社会の変化に即応して、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質能力を高める活動を行っています。また、その中で、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性を養い、そして、たくましく生きていくための健康や体力を獲得することを重点的に取り組んでいます。

Vol.

51

2020
#1



誰かの力になる。
それが キミの力になる。

活動的で自立した青少年を育てる ★ ボーイスカウト！

関 正樹 連盟長 就任される！



●プロフィール

関 正樹 (せき まさき)
関影商事株式会社 代表取締役社長
1963 (昭和 38) 年 茨城県筑西市出身
1972 (昭和 47) 年 下館第 3 団カブ隊入隊
2019 (令和元) 年 茨城県連盟連盟長就任

ごあいさつ

連盟長を拝命しました 関 正樹 でございます。

わたくしとボーイスカウトの出会い、40 数年前、下館第 3 団、現在の筑西第 1 団にカブスカウトとして入団したところから始まりました。

このボーイスカウトの経験を通し、学校では得られない関係を構築することができ、自然とのつながりを深めることができました。今思えば、良い経験ができたと実感しております。

平成 2 年からは父 正夫 が連盟長を務めることとなり、親子共々様々な場面で大変お世話になりました。現在も、スカウトとして身に着けたその精神は私の中に生きておりますので、今後の活動に活かして参ります。

さて、日本のボーイスカウト運動は大きな変革期にきています。加盟員の減少が長く続き、十万人の大台を割ってしまいました。アウトドアブームやスポーツクラブの隆盛、学びの広がりにより、ボーイスカウト運動に加入する子供たちが様々な分野に分散しているためでもあります。

しかし、一方でいじめや不登校、引きこもり、スマートフォンの普及による読解力の低下やネットトラブルなどの社会問題も深刻化し、子供のコミュニケーション力の低下や野外体験の不足が心配されています。野外を教場とし、班制教育で責任感やリーダーシップ、コミュニケーション能力を育てるこのボーイスカウト運動は、これからの時代に必要とされている組織であると思っております。

本県連盟でも、八木理事長のもと、本年度は激動する国際社会にあって日本の未来を担う青少年の健全育成を目指し、スローガンを「活動的で自立したスカウトを育てよう!」と定め、事業を展開しているところです。

特に第 24 回世界スカウトジャンボリーには 40 名のスカウト・指導者が参加し、国際交流を深めたと伺っております。また、来年度の第 20 回茨城県キャンボリーの開催に向けた準備もスタートしまして、わたくしも連盟長として微力ながら、茨城県、ボーイスカウト振興茨城県議員連盟及びボーイスカウト茨城県連盟維持財団と連携協力して、この運動の発展に尽力したいと考えています。

最後になりましたが、本運動の推進は、各団・各隊にける指導者とスカウトが自信を持って生き生きとした活動を展開することが基本であり、そのことが県民の期待に応じ得ることとなり、同時に多くの青少年に開かれた活動となり、加盟員の拡大につながるものと確信いたします。

みなさん、共に手を携えて頑張って参りましょう。



● ボーイスカウトのキャンプとその基準



● ボーイスカウトのキャンプは、何を目的にしているのでしょうか。

ボーイスカウトは「スカウト精神」と「好奇心」を持つことが大切であると言われていいます。これと同じように、スカウト・キャンプに取り組む指導者には、大切で確実に理解していなければならないことがあります。それは、「スカウト・キャンプはスカウティング・ゲームである」ということです。そのため「ルール」が「野営基準」です。

この「野営基準」とは、規定や規則のように守るために作られたものとは意味合いが全く違います。スカウトキャンプがスカウティングであるための基準、言わば「共通の約束事」のようなものです。規律を守らせるためのものではなく、進むべき方向への手助けになるもので、スカウティングを正しくより楽しく行うためのものなのです。

さて、この野営基準ですが、その基盤となっているものは何でしょうか？ それは…

「スカウティング・ゲームであるスカウト・キャンプはスカウトが自ら行う、楽しく魅力溢れるキャンプ」

ということです。つまり、単にキャンプが楽しかった……というのではなく、仲間との関わりの中で、自分の成長に（挑戦して、できるようになること）気づき、それが嬉しくて「またキャンプしたい！ 早くキャンプに行きたい！」と思えるものであること、そして、他の班とキャンプの全ての面で競い・高め合える……ということが大切で重要なのです。スカウティングの全てがこの基盤の上に成り立っているのです。

つまり、スカウト・キャンプに求められているのは、キャンプの仕方ではありません。

いかに自分の知識や手技を深め、そして感受性や情緒を高め、視野を広く持ち、全てのものに対して愛情を抱き、思いやりの心を持ち、自分の役割を積極的に果たし、仲間と協力し、友情の中にもちよつとした競い合いができる「場」であり「機会」としてのキャンプなのです。

このように、いろんな成長や発見の種がたくさんあって、それが班というグループによって、発芽し育まれ、また自分自身で能力を培いながら成長できる（＝スカウティング・ゲーム）……といった環境が継続してそこにあるのがスカウト・キャンプなのです。その環境を作り上げるにあたっての指標であり、ルールであり、軸柱となるものが「野営基準」なのです。

冊子「野営基準」や「指導者のためのスカウト・キャンプ」での文章表現は「～である」「～でなければならない」「～とする」と断定形が多く使われています。それだけを見るとガチガチに縛られているように見えてしまいます。しかし、それが書かれた時代背景や当時の指導者層を見てみれば、当時はそう書くのが普通だったであろうと思われます。しかし、良く読み解いていくと、それらは、「こうしなければならない」「あししなければならない」という単なる行動律ではないことが見えてくるのです。すなわち、スカウトを導き育てるために、指導者に対し「あなたはそれをどのように極めていく（いる）のかい？」「そのココロは何なのか理解しているかい？」という投げかけ（意図）が見えてくるのです。

つまり、指導者が極めることによって、スカウトの導き方、育て方をしっかりと考えて

いこうということなのでしょう。



班の仲間という気の置けない仲間と衣食住を共にし、実際に行なったことが、すぐに結果となって返ってきて、その喜びをもツラさも仲間と共有でき、また、他のライバル班と切磋琢磨できるための場が「スカウト・キャンプ」であり、スカウトたちが「こうしよう」「ああしよう」「こっちのほうがいいよ」「こんなやり方見つけたよ」「それいいね！」「もう少しだ、がんばれ！」「やったあできた！」「やりとげた！」等々……という、チャレンジ・創意工夫、面白がる心、楽しむ心、仲間との協働、分かち合い等、つまり本来求められているスカウティングが実践できる「楽しい」成長環境がスカウト・キャンプなのです。そんなスカウト・キャンプが実現したならば、それは「楽しいキャンプ」にちがいありません。

ですから、「野営工作をしなければならない」、「焚火で料理しなければならない」、「Aテンを使用しなければならない」……といった、我々がこれまで「それがボーイスカウトの方法だ、伝統だ！」と思ってきたものは、「野営基準」ではありません。それにとらわれて狭い見方しかできないようでは、それはボーイスカウトのココロとはかけ離れたものになってしまいます。ボーイスカウトは、そんなちっちゃな狭く苦しいもんじゃありません。B-Pは「スカウティングは時代とともに変わるべきものだ」と言っています。つまり、スカウティングの基本原則は変わらないけれども、そのやり方は、その時代や地域に合ったものでなければならない「運動」であるということなのです。

● 野外教育とスカウティング



● 野外教育とは

野外教育とは、「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動」の総称のことです。そして「自然体験活動」とは、自然の中で、自然を活用して行われる各種活動のことで、具体的には、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった「野外活動」、動植物の観察、星の観察、空気・水・地形や地質の観察といった「自然・環境学習活動」、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった「文化・芸術活動」などを含んだ総合的な活動のことをいいます。つまり、野外教育は、自然体験活動を取り扱う教育領域であると位置付けられます。

● 野外教育の目標

野外教育の目標には、一般的に、自然に対する興味・関心の醸成、自然と人間の望ましい在り方の理解、自然体験活動の楽しさや技術の習得、自主性、協調性、社会性、創造力、忍耐力の育成など、様々な目標が考えられます。

また、青少年を対象とした野外教育は、「青少年の知的、身体的、社会的、情緒的成長、すなわち全人的成長を支援するための教育」とと言えます。まさに、スカウティングの教育目標に合致しています。

● 「生きる力」の育成

少し前に、「生きる力」という言葉が教育界や野外活動団体で好んで用いられた時期がありました。平成8年7月における第15期中央教育審議会の第一次答申で出されたもので、これからの教育の在り方として、

「生きる力」を育成することが重要であるとされたのです。それは、令和になった今も変わってはいません。

「生きる力」とは……

「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性であり、そして、また、たくましく生きていくための健康や体力である」とされています。それは、今のボーイスカウト日本連盟の運営方針である「活動的で自立したスカウトを育てる」にも表されています。

また同答申では、「生きる力」の育成方策の柱として、青少年の生活体験・自然体験の機会の増加を求めています。そのような意味で、教育として自然体験活動を捉える野外教育の充実が、青少年の「生きる力」を育成する上で極めて重要であると考えられているのです。

社会に役立つ、心身の調和のとれた青少年を育成するためには、家庭、学校、地域社会の中で、青少年が自主的、主体的な活動体験を豊富に積み重ねることが必要でありたいへん重要となっています。かつては、自然との触れ合いや異年齢の交流など、日常的な遊び等の環境が身近なところにあり、子供たちの人間形成に重要な役割を果たしてきましたが、今日では、そのような遊びの機会や場が減少してしまいました。

そのため、行政や地域が、意図的、計画的に、子供たちに様々な体験の機会を提供する必要性が生じてきています。

特に、青少年にとっての野外教育は、自然の厳しさや恩恵を知り、動植物に対する理解や愛情を培うなど、自然や生命への畏敬の念を育て、自然と調和して生きていくことの大切さを理解させる機会を与えることとなっています。さらに、自然の中での組織的な活動は、きまりや規律を守ること、協力することの大切さや、自ら実践し創造する態度を学ぶなど、体験活動を通じた総合的学習の機会を提供するもので、青少年の育成にとって極めて有効なのです。

● 野外教育に期待される成果

ア 感性や知的好奇心を育む

野外教育の最大の特徴は、自然の中で、自然を活用した教育が行われる点にあります。それは、自然については、自然そのものが教育力を持っていると言われているからです。つまり、自然の美しさ、雄大さ、神秘性、厳しさなどは、直接人間の五感に直接働きかけ、人々に感動や驚きを与えるからです。

野外教育における、このような感動や驚きの体験は、青少年の感性を育み、また、知的好奇心や探究心を育てていきます。

イ 自然の理解を深める。

自然の中での体験的活動をととして、青少年は、動植物、水、土、気象などに関する知識やその関連性、さらにはその重要性を学ぶことができます。こうした自然に対する理解は、日常生活における環境保全や自然愛護への積極的な態度を培い、今日問題となっている地球規模の環境問題への認識を高めることとなります。さらには、生

物としての人間の内的仕組みや生命の尊さを学ぶことにもつながっていきます。

野外教育は、自然現象や自然の仕組みを総合的に学び、環境問題への認識を高める最良の機会となっています。

ウ 創造性や向上心、物を大切にすることを育てる

野外教育は、非日常的な自然の中での素朴な生活や活動が伴います。物質的な豊かさや便利さの中で暮らす青少年にとって、こうした素朴な生活や活動は、不便なものであり、時には苦痛を感じることもあるでしょう。

しかし、このような環境の下での困難を乗り越える体験は、青少年に成就感や達成感をもたらし、向上心や忍耐力を身に付けさせていきます。

また、自然の中での素朴な生活は、水や火の大切さ、物を工夫して使うことの楽しさなど、創造性や物を大切にしようとする心を育てるとともに、素朴な生活の楽しさなどを実感する場にもなります。

エ 生きぬくための力を育てる

青少年は、自然の中での様々な活動の実践や繰り返しを通じて、知識や技術を単なる理解としてではなく、いわば生活に役立てられる知恵として身に付けていきます。また、こういった知恵は、災害などの緊急時にあって、生きぬくための力ともなるのです。

さらに、自然の中での各種活動は、危険を回避したり、安全を確保したりする能力や、自らの安全は自らが守るという意識を高めていきます。

オ 自主性や協調性、社会性を育てる

野外教育では、一般的に小グループでの生活や活動が主体となります。こうした生活や活動では、自分のことは自分です、仲間とよく相談し協力する、弱い者を助ける、といった態度や行動が求められます。このような生活や活動の実践・反復は、青少年の自主性や協調性、社会性の育成に大いに役立っていきます。

カ 直接体験から学ぶ

近年のめざましい情報化の進展は、人々の生活に豊かさをもたらしていますが、その一方で、子どもたちのスマホやテレビゲームへの没頭に見られるように、間接体験や疑似体験の増加など、情報化の「影」と言われる負の影響が生じているのも事実です。

今、それらを補う直接的な体験の必要性が高まっています。様々な直接体験の機会を提供する野外教育は、こうした情報化の「影」の部分を補う機会としてたいへん重要なのです。

キ 自己を発見し、余暇活動の楽しみ方を学ぶ

野外教育で取り扱われる各種の自然体験活動は、青少年にとって新鮮であり、印象深い体験となることが多いことでしょう。こうした新しい体験によって、青少年は、これまで気が付かなかった自己の長所や能力を発見することができるのです。また、この時期の体験は、生涯にわたって余暇活動を楽しむための新たな興味・関心を引き起こし、健全で豊かなライフスタイルの形成にも繋がります、人生を豊かなものにしていきます。

ク 心身をリフレッシュし、健康・体力を維持増進する

現代のような複雑な人間関係や時間に追われるゆとりのない生活から、自然の中に足を踏み入れると、時間的にも空間的にも、落ち着きやすがすがしさを感じられます。自然の中での生活や活動は、心身をリフレッシュさせ、健康・体力の維持増進にも役立っています。

いかがでしょうか。これは文部科学省の「青少年の野外教育の振興に関する調査研究について」の報告書をボーイスカウトに向けて、多少加筆したものです。

まさに、スカウト教育の8つの要素である「ちかいとおきて」「行うことによって学ぶ」「チームシステム」「個人の進歩」「自然」「成人の支援」「象徴的枠組み」「地域との連携」そのものではないでしょうか。

この先、社会がどう変わっていくかを予測することがますます困難になっていくといわれる中で、ひとりひとりの子どもが、自分の良さや可能性を認識し、他者を尊重し、多様な人々と協働しながら豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会のつくり手となるような環境を作っていくことが求められています。

その環境が、創設当時からあるのが、このボーイスカウト運動なのです。

01

スカウト・指導者 40 人が

いきいき茨城ゆめ国体奉仕

9月28日(土)～10月8日(火)の間、いきいき茨城ゆめ国体(第74回国民体育大会)の各種競技が、県内各地で行われました。ボーイスカウト茨城県連盟は、笠松運動公園陸上競技場で実施される「いきいき茨城ゆめ国体」の開会式・閉会式の支援を行いました。また、支援を予定していた「いきいき茨城ゆめ大会(第19回全国障害者スポーツ大会)」の開会式・閉会式は、台風19号により残念ながら中止となってしまいました。

この両大会奉仕のために名乗りを上げたのは、スカウト21名、指導者19名の総勢40名。支援は3つチームで行いました。

1つ目は、「5旗掲揚チーム」。

国旗、大会旗、日本スポーツ協会旗、茨城県旗、ひたちなか市旗、(鹿児島県旗)の掲揚及び降納がその任務です。

2つ目は、「大会旗保持チーム」

大会旗の入場行進、ステージ上の大会旗の保持がその任務です。

3つ目は、「式典用具担当チーム」。

式典ステージ上の式台・杯安置台、旗台座、皇室用机椅子の設営・撤去、宣誓台・整列用ロープの設置・撤去、会場片づけ補助、標旗の設置・撤去がその任務です。

両大会の練習会、リハーサルは8月31日から始まりました。猛暑の中での活動となり、待機時間が長かったり、任務開始のタイミングがなかなか掴めないなど、多少の困難はありましたが、概ね順調でした。しかし、慣れない奉仕活動で、規律正しい姿勢と行動への意識が足りないことか見て取れたため、全員でミーティングを行い、ボーイスカウトとして誇りある姿勢と態度で対応することを改めて全員で確認し約束をしました。それ以降の皆の意識変化は見ちがえるものがあり、以後大会側からは毎回「ボーイスカウトは素晴らしい」との評価をいただきました。

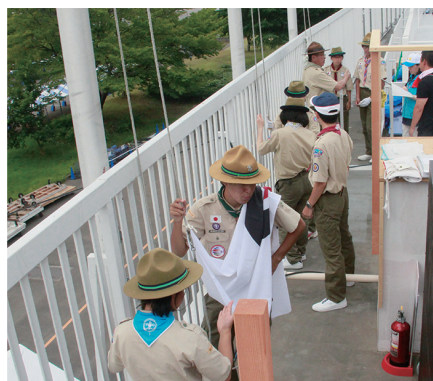
そして迎えた本番当日。多少の不安があるものの、全員がそれぞれの任務を精力的にかつ確実にこなすことができました。皆、疲れはピークでしたが、やり遂げた自信と達成感で晴れ晴

れとした気持ちで家路につくことができました。

開会式、閉会式では、整列の状態での待機が長く「気をつけ」「休め」での不動の姿勢を30分以上続けなくてはならないこと、ステージ上の重量設置物の搬送設置を少人数でしなければならないこと、障がい者用の丸いす3000個の搬送・設置・撤去や、音楽に合わせた諸旗の掲揚と日陰のない中での待機等、身体と精神に相当な負担を強いることとなりましたが、奉仕者全員が一言の愚痴も文句も言わず、自らすすんで、積極的に、笑顔で奉仕を行ったことは、まさにスカウト精神の発露そのものでした(誇張ではありません)。この奉仕を通じて、参加したスカウト・指導者それぞれが、スカウトとして大いに成長したことを実感されたことでしょう。

ゆめ大会は台風19号の接近で2日前には中止の大英断がなされました。残念でしたが、まさに適切な対応でした。

県国体局には、このようなチャンスをいただき深く感謝いたします。また、このチャンスを掴み、やり遂げ「ボーイスカウト茨城県連、ここにあり!」を見事に体現してくれた、スカウト・指導者諸氏を誇りに思うと同時に、心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



02

大井川県知事表敬訪問

8月21日（水）、アメリカで開催された第24回世界スカウトジャンボリーから帰国した指導者とスカウトの代表が、茨城県庁を訪問し、大井川和彦 県知事と柴原宏一 茨城県教育長にジャンボリーの参加報告をしました。



03

全国防災キャラバン実施

8月25日（日）、「そなえよつねに・みんなでつくる、準備のこころ」をテーマに全国防災キャラバン（茨城会場）が、つくば市のイオンモールつくばにおいて実施されました。

この防災キャラバンは、未来を担う子どもたちとその保護者を対象に、万が一の有事の際に役立つ「防災」に関する知識やスキルを得ていただくことを目的にボーイスカウトとイオンが共同で全国で実施しているものです。

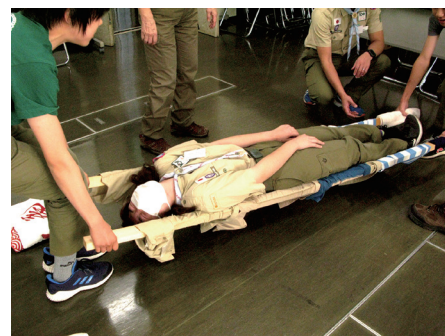


04

スカウト救急法講習会

11月17日（日）、県立青少年会館でボーイスカウト救急講習会が開催されました。この講習会は、スカウト活動するフィールドで起こり得るケガや病気を防止し、万一手当が必要になった場合に、即座に対応できる救急の知識と技能を修得するためのものです。

ボーイスカウト救急法講習会は、消防署の上級救急救命講習会を補完するもので、今回はスカウト8名、指導者3名が参加して、救急法を学びました。



05

スカウトの日

毎年9月の敬老の日（第三月曜日）を「スカウトの日」として、全国のスカウトや指導者が地域社会への奉仕活動等を全国で一斉に展開し、スカウト一人ひとりが地域社会に貢献することを目的に実施しています。

この持続可能な社会を目指して、自分たちができることから取り組むことで、みんなで地球を大切に作る取り組み「スカウトの日」の活動は、昭和49年のシニアスカウトフォーラムでの『より良い社会を目指して、スカウトは何をすべきか』の取り組みから始まりました。

スカウトの日は、地域清掃や植林活動、社会福祉施設の訪問など敬老の日にちなんだ活動、人権・平和・国際理解をテーマとした活動、地域のニーズによる地域の方々と共に行う身近な奉仕活動、また、持続可能な開発目標（SDGs）を達成するための活動などを、積極的に展開しています。

茨城では、34の団で、多くのスカウト、指導者、そしてスカウトの家族や関係者が、様々な活動等に取り組みました。



01

日本連盟・指導者定型訓練 ウッドバッジ研修所 開設

ウッドバッジ研修所は「スカウトコース（3泊4日）」と「課程別研修（1日型）」の2つで構成され、その両方を修了すると、スカウトの隊の隊長の資格を得ることができます。

そのウッドバッジ研修所スカウトコース茨城第3期が11月1日から4日まで（参加者26名）、また同課程別研修茨城第3回（ビーバー、カブ、ボーイ、ベンチャーの各課程計27名）が11月24日に、共に土浦市青少年の家とそれに隣接するボーイスカウト茨城県連盟土浦訓練野営場で実施されました。

<参加者の感想より>

◆とても多くの気づきを得ることができました。今後の隊指導や受けている役割で、学んだことを発揮していきたいと思っています。

◆研修前・1日目はとても不安で、分からないことだらけでしたが、所長をはじめ隊長達が声をかけてくださり、説明してくださったりして、段々となれました。考える時間や最後までやれるように時間調整していただいたので初心者としては、とても理解しやすく、のびのびと楽しくできました、ありがとうございました。

◆子どもの時にスカウト活動をやっていないくて、大人からの参加なので、全体の流れをスカウト目線で体験できて良かったです。楽しいメンバーに出会えて良かったです。

◆改めてボーイスカウトの原理・原則やプログラムの展開方法を学ぶとともに、ボーイスカウトの楽しさ、面白さ、素晴らしさを実感することができました。

◆非常に楽しめました。ありがとうございました。この楽しさを子どもにつたえられればと思います。

◆研修全般、楽しみました。指導者として子どもを預かる立場、安全面での心得等、まず導入として多く学ばせていただきました。

02

スキルアップセミナー スカウトソング・スカウトゲーム

スカウトソング研修会が7月7日（日）に、ひたちなか市のふぁみりこらぼで、15名の参加で実施されました（写真上）。また、スカウトゲーム研修会が、12月1日に阿見中央公民館で12名の参加で実施されました（写真下）。

いずれもゲームやソングを得意とする県連トレーニングチームの指導で、笑いと感動に溢れた、楽しい研修となりました。



03

参加して満足 「100%」 セミナーシリーズ

茨城県連では、100%満足する？研修を2つ行っています。1つは「WB研修所参加者のためのスカウトコースを100%楽しむスキル講座」で、WB研のキャンプ生活に不安を抱えている指導者のためのキャンプセミナー（写真上）で、8月25日に実施されました。

もう1つは、スカウトスキルからスカウト教育を紐解いていく「100%実践講座」（写真下）で、9月15日に実施にされました。



SCOUTING 茨城

SCOUTING 茨城 2020年 第1号 通算51号 令和2年2月発行
発行 日本ボーイスカウト茨城県連盟
〒310-0034 水戸市緑町1-1-18 茨城県立青少年会館3F

※ SCOUTING 茨城は、不定期で発行しています。
※ SCOUTING 茨城は、県連ホームページからもダウンロードできます。
<http://www.scout-ib.net/>
※ SCOUTING 茨城に掲載されている写真・文章等は著作権法等により保護されています。
著作権者に無断の複写・転載は堅くお断りいたします。

